

自由投稿

無題

闇の中に
光る目は
いったい何だ

闇の目に
力まかせに
赤々と燃えたぎる
炎を投げつけた

自由投稿

ダベリ・コンパ 始末記

「飛翔」前号の予告通り、ダベリ・コンパを実施しました。以下はその報告です。

日時：11月22日 夜9時～翌朝まで

場所：広島城内

参加者：13名

—— 時系列に基づいて ——

広大正門前に集合。何人来るだろうかと心配であったが、後には、おどろきに変わる。なんと女性の参加者さえたのだから。

広島城に着く。広大～広島城間を歩いたので多少疲れた。

コンパの開始。まずルールの説明。「1人

絶対矛盾さ(51生)

闇の中で
私を凝視する目は
いったい
何を訴えたいのだ

闇の目は消えた
そして
私は見た
冷たく透き通った
鏡の中に浮ぶ
私の目を

パトスの会

ずつ順番に10分間しゃべる。他の人は黙っている。その間、酒を飲むのは自由で、これを陽がのぼるまで繰り返す。各自の紙コップに日本酒がつかれてゆく。

中国新聞社のカメラマンが撮影に来る。若S氏根性を出して、しきり写ろうとする。

H氏より「やさしさ」論が提示される。これが話題の中心となって激論がかわされる。

I氏、星夜の美酒にひとり陶然となり、しきりに過去のことでF氏に謝ろうとするが、その論理、支離滅裂。

体調の悪かった老S氏と翌日用事のあった

○氏帰る。

夜食(おにぎり) このころより夜間の寒さはまさに殺人的。囲んでいた円をさらに小さくして、皆でからだを寄せ合いながらちこまる。

またもやH氏より恋愛論が提示される。以下その楽しい—うちあげ話。

逍遥派にならいて、歩きながら話すことになった。

突然城内にはいつてきたパトカー止まりそのポリスイわく、「なんしよるんかね」I氏少しもあわてず悠然と「朝日が出るのを待っています。」親切なる日本のポリス答えていわく「ほんじゃあ、黄金山の方がよう見えるがの」

H氏、にわたりの真似をして朝を告げる。ここで全員で「バンザイノ」一路広大へ
広大前で解散。

—— テーマ系列に基づいて ——

- ①パトスの会とは何か
- ②「やさしさ論」
- ③友情論 —友を親友と呼べるか—
- ④「極限状況」論 —日本とインド—

自由投稿

私の問題意識

さて、今から私が述べるのが批判的になり、かつ筆者である私にその批判が当てはまるという無責任さを許してもらえることを前提に、私のかかえている問題意識を述べたい。

○哲学の復権

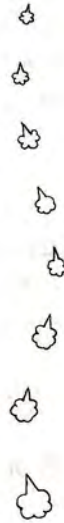
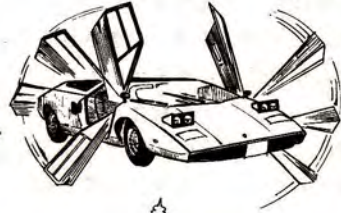
現代ほど「思想なき時代」、「哲学の復権」が問題となっている時代もないだろう。あるいは、そんなことさえ問題とされない時代かもしれない。学生が古今東西の哲学者に心酔し、その思想に触れ、自らが悩み、考える人間像、哲学者像を目指していたのは昔々の物語となってしまったのだろうか。哲学はただの教養と化してしまったのか。実際、我々広大生をながめるにつけ哲学青年がいないことを感じ

⑤「多数意見」について考える。—従うべきか否か—

⑥「数学」論

⑦作家論

⑧恋愛論



スーパーカーの
新技巧

社会文化コース3年 松岡 勇

る。学生街の喫茶店といっても、もっぱらTVゲームやマンガ本に熱中している学生の姿しか見えないというのも何か味気ないものだ。もっとも、おまえは哲学だ思想だと抜かすことができるならば、その説明をしてみろノと言われると私は自分の無学さをさらけ出すことを恥て、黙さなければならない。それほどまでに哲学自体については語り難い。

だが、哲学をする意義については述べるができる。不可解なる人生に真正面から取りくもうとする不可解なる人間、それこそが哲学では解決できない命題を哲学するという矛盾を乗り越えて、自己の本質に近づくことができるのだ。言い換えるならば、哲学をしようとする人間の態度そのものの中に、人間が現実を客観的に把握する前提としての自己の目

覚めがある。一分一秒、目まぐるしく社会が流動化している現代だからこそ、我々はまず自己をその中核として確立してゆかなければならない。

○ロマンチズムの復権

「あなたは現在幸福ですか？」という原理運動家の言葉ほど我々の心に深くつきささるものはない。物質的にも精神的にも何不自由のない毎日を過しながらも、ふっともの足りなさを感じている気持ちにずしりと響く。だからといって統一原理が我々の日常生活を真に満ち足りた日々してくれるかどうかは疑問だ。本来、幸福感などはその人自身の気持ちの持ちようだ。もちろん、物質的満足が幸福の条件のひとつであることは確かだ。しかし、客観的にみて物質的条件のそろった不満足人間を、ぜいたくな悩みだと責めるべきでない。否、むしろそれゆえに称賛すべきだ。我々は人間、しかも若者であって、飼いやけの中の家畜ではないのだから。最近では、現実という名のもとでいかに多くの人がこの飼いやけを求めていることか……と自らも反省

では何を求めるべきか？ それこそが理想ではないだろうか。現実社会に密かな不満を持ちながら、どうしようもないとあきらめ妥協してしまう人とは反対に、そのわずかな矛盾と不満さえ真正面に捉え、対決しようとする姿、これこそが自己と社会の可能性を信じ、前進しようとする人間像ではないのか。もちろん、その真摯な態度は自分を不安と不満へ導びくかもしれない。理想を目指す人間はドンキホーテのごとく、常に現実の自分を見誤る危険があるかもしれない。もっとも、果して現実の自己とは何だろうか。理想へ一歩近づくならば、現実の自分というものを忘れるだけの純粋さがあっても良いのではないだろうか。極限状態においてすら純粋な信念を持ち続けること。それこそが「若者」の特権ではないだろうか。「若さ」とは自己の純粋な信念のみを振りどころに前進することだ。そして「ロマンチズムの復権」とはまさに、現実社会における「若さ」の復権にはかならない。我々は自己の内にある未熟な「大人」に訣別しなくてはならない。

大学院地域研究研究科座談会から

11月20日

参加者17名 編集部

総合科学部一期生を迎い入れるべく、研究科（マスターコース）が、53年度よりスタートした。学段階においても見られるように新しい試みゆえの問題は、模索と思考錯誤の域を出ず、いまだ解決への道も見い出せないというのが現実である。そこで一期生として、いろいろな困難な条件の中を4年間過ごし、そしてまた、研究科の一期生として、パイオニアとしての道を選択された院生のみなさんに集ってもらい、教官をまじえて、院について、いろいろ語ってもらう機会を持った。以下、その要略である。

特徴と課題について 既存の学問分野の中においても、学問的に追求していくと、当然の帰結として、境界領域をやらざるをえなくなる。また現実が存在する、あるいは、生起しつつある問題の解決の学を考える

としたら、狭い学問分野というところでとらわれていてはできないということになる。そこで「総合性」というものが見直されてくることになるのである。つまり《これまでの学問のあり方への反省》（ひと言で言うとするなら）ということになるわけである。そのような合意のもとに集まって、できたのが、総合科学部と言って良いと思われる。

地域研究科の特色ということでは、地域に根ざした「内発的文化の創造性」というものを重視することが、現代主義へのアンチテーゼという意味をもつという理論的な基礎とともに、また地域を限定することによって、諸分野の学問体系を統合してゆき、さらに比較するというところに「総合性」が発揮できるという方法的意義が付加されるという点である。

学問水準向上という側面から言うと、いわゆる伝統的な枠組みに組み込まれていないというところから、自由に（とらわれずに）やってゆけるという反面、基本的な体系というものができ上がっていないばかりか、学問的方法論も確立しておらず、非常に、やりにくさが伴うというマイナス面もある。また新しく構築したものが、既存の学会の批判に耐えうるものかどうかというところで、学的水準が試されるという側面も忘れてはならないし、これまでの学問のあり方の反省といっても、既存の学会の成果をあなどってはいけないということは注意しなければならないことである。

望まれるべきことは、批判の視点がどこにおかれるべきか、という問題意識の研鑽と、既存の学問分野の批判にも耐えうるような研究との二つの「刻苦

勉励」を続けることである。そして、改革的なことをやり遂げようと思えば、すぐには成果が出ないということ、また、現在の思考錯誤、まわり道も、将来のプラスに変えていくこと、そのためには、現在の自分の考えを大切に育てていくことによって、成し遂げられることなどが一致した意見であった。

最終的には、これらを空洞化させない努力がなされているかどうかということであるが、実際に、現状では疑わしい。これまで、既存の枠にとらわれないところで研究してこられた教官と、思考錯誤の中を、これからも歩もうとする一期生との間に、さらには、学部生との間に、日常的に情報交換、討論がもたれることが、少なくとも、当面の目標として、やっていかねばならない。というのが、座談会に出席して感じたことであった。

学 部 の 記 録

人 事 異 動

〈採用〉

(教官の部)

12. 15 安倍喜美子 (社会文化研究助手)

(事務の部)

1. 8 平原 靖子 (地域文化)

1. 10 佐々木祥子 (情報行動)

〈配置換〉

(事務の部)

10. 16 八百野幸江 (庶務係) 附属学校部皆実附属学校係より

久保 力 (庶務係)

文学部庶務係より

山崎 進 (用度係)

厚生課厚生係より

古寺 一郎 (学務第一係)

教育学部厚生補導係より

花岡 静三 (厚生補導係)

附属図書館整理課集書係より

内田 精二 (厚生補導係)

医学部学務係より

白鷺 和子 (英語)

医学部附属病院医事課中央診療係より

〈辞職〉

(教官の部)

12. 15 中沢 潤 (環境科学教務補佐員)

(事務の部)

10. 31 柿原 敏博 (環境科学)

12. 31 辰川 啓子 (環境科学)

吉岡由紀子 (庶務係)

〈配置換〉

(事務の部)

10. 16 岩本スミエ (庶務係主任)

歯学部庶務係主任へ

松本 伸 (庶務係)

教育学部厚生補導係へ

本多 隆雄 (用度係)

医学部附属病院医事課入院係へ

寺脇 義則 (学務第一係)

学生課学生第一係へ

俵 正司 (厚生補導係)

医学部学務係へ

吉田二美恵 (英語)

附属図書館整理課集書係へ

〈部内配置換〉

1. 1 入江 邦子 (庶務係) 地域文化より

横田 克広 (学務第二係)

厚生補導係より

麻尾 昌子 (環境科学)

学務第二係より

〈改姓〉

12. 2 吉岡由紀子 (庶務係) 旧姓柿田

12. 13 土肥 邦子 (情報行動) 旧姓石川

海外渡航者

(出張および研修)

丹治信義 (ドイツ語 助教授)

渡航先 ドイツ連邦

目的 ドイツ文学及びドイツ語研究

期間 53.11.15～54.6.29

編集後記

本年度第三号の飛翔は、「新年号」になってしまいました。大学祭は遠い記憶として片隅に迫いやられてしまったかも知れませんが、各奮闘記からは、「大学祭はおもろくないのう」という声に対し、主体制をもって楽しみとなすという姿があることを感じられたのではないのでしょうか。また、研究室については、もっと活用できるもので、改善してゆけば大学生生活上、大きなプラスとなりえることに気づかれたのではないのでしょうか。考えてみてください。

(文)

11号ができました。まあ読んでみて下さい。

(浜)

駅伝で2年の日に抜かれたタタリは'78年中に消えてもらいたい。アイツは人間か!!

(裕)

人は死んでも、何かを残していくはずであると思いませんか?

(里)

初めて編集に参加して、へへ楽しかった。

(哲)

カオルさーん、たまには学校に出て来て。授業には出なくていいから編集会議には顔出して来て。(田の友)

(耕)

原稿募集

飛翔が自由投稿で埋まるほどの投稿を期待しています。内容の種類は問いません。特に学生諸君の研究発表の場として大いに活用してください。また表紙を飾るイラストや写真も募集しています。どちらも編集委員か厚生補導係へ随時持ち寄って下さい。